

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 阿倍仲麻呂の在唐歌をめぐって 実作説の可能性

著者	上安 広治
雑誌名	日本文学文化
号	1
ページ	33-44
発行年	2001
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006315/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006315/</a>

# 阿倍仲麻呂の在唐歌をめぐる

— 実作説の可能性 —

上 安 広 治

## 一 はじめに

大宝律令の制定を目前にひかえ、宮廷では柿本人麻呂の高らかな歌声がこだまする時代、阿倍仲麻呂は文武二（六九八）年、中務大輔船守の子として生を受けた。なお彼の生年については、それを論じるに足る唯一の資料『古今和歌集目録』の記述をめぐり、従来この文武二年説と大宝元（七〇一）年説との対立があるわけだが、かつて杉本直治郎氏が詳細に考察なさった内容を尊重すれば、やはり前者を妥当と見るのが穏当だろう。そして靈龜二（七一一）年、一九歳で第八次遣唐留学生に選ばれ、翌養老元年に入唐。国子監の内では太学に学び、科挙に登第して進士となり、以来要職を歴任する。

そして天平五（七三三）年三六歳の時、第九次遣唐使帰還に合わせ、自身帰国を上申するも唐朝はこれを却下。おそらくこの時玄宗は、仲麻呂の内政・外交両面の手腕に期待を寄せ、彼を手放したくはなかったであろう。その後はこの第

九次遣唐帰還船で出港するも遭難し、崑崙漂着後に長安へ戻っていた平群広成の渤海国経路での帰国に尽力したり、儀王友に拔擢されたりもして、いよいよ玄宗の厚い信任を得る。

天平勝宝五（七五三）年、はや五六の齢に達し秘書監兼衛尉卿となっていた彼に朗報が届く。来唐中であつた藤原清河を大使とする第一〇次遣唐使の帰還に合わせ、再び帰国を願ひ出たところ、今度はこれが許可されたのである。そして清河や仲麻呂らは直後に揚州の延光寺を訪ね、数度の渡航失敗により失明した鑑真に新たに東行を要請することとなる。

同年十一月一五日夜、第一船に清河・仲麻呂ら、第二船に古麻呂・鑑真ら、第三船に真備・普照ら、第四船に布勢人主らが乗り込み、この帰還四船は一路日本へと出帆する。ところが、第一船は折りからの南風に煽られ現在の沖縄近海にて難破、その後は安南つまり現在のベトナムにまで流されてしまふ。そしてやつとのことで命からがら長安に戻つたのは、天平勝宝七（七五五）年仲麻呂五八歳の時であつた。

その後は玄宗の死後も唐朝に仕え、天平宝字四（七六〇）年から天平神護二（七六六）年の頃、おそらくは先の安南漂着の経験をかわれ「安（鎮）南都護」、次いで「安南節度使」を拝命し、遷任でなく実際に現地に派遣される。そして神護景雲二（七六八）年頃その任を解かれ長安に戻っていた彼は、宝龜元（七七〇）年正月、七三年間の生涯に幕を閉じる。

以上の内容は、主に杉本直治郎氏や今枝二郎氏らのご研究を踏まえ、仲麻呂の生涯をごくごく簡潔に纏めてみたものであるのだが、以下考察を試みていく際の前提事項でもある。

さて、周知の通り『古今和歌集』巻第九「羈旅歌」の部は、僅かに一六首の歌をもつて一卷を特立し、その冒頭部には、

もろこしにて月を見てよみける 安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

この歌は、昔、仲麿を唐土に物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使まかりいたりけるにたぐひて、まうで来なむとて出で立ちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人、馬のはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめるとなむ語り伝ふる。

と掲出をした一首（四〇六番歌）が配置されている。古今入集以後も時代を問わず、実に数多くの文献に取り込まれることとなった本歌ではあるが、とりわけ藤原定家によって『小倉百人一首』に採歌されて以来、飛躍的にその享受状況を拡大することとなった。いきおいその研究も古来盛んに行われ、とくに戦後から今日に至る研究史については、多かれ少なかれ杉本直治郎氏の大著『安倍仲麻呂傳研究』の成果を仰ぎ見つつ、本歌は仲麻呂の実作なのか、それとも後人による仮託なのかという点を主要なテーマとしながら、その作歌事情や背景、あるいは日本への伝達事情やその後の歌語りの状況などをめぐって多彩かつ魅力的な考察が数多く成されてきた。

以下本稿においても、これら諸点を中心に据え考察を試みていくこととなるのだが、本来ならばまずはその研究史について整理し、十分な検討・分析がなされて然るべきであろう。だが、紙幅の関係上誠に遺憾ながらそれを割愛せざるを得ない。ただ付言すれば、本歌をめぐる実作・非実作の論議に関しては、それを絶対的に証明する決め手が無いということだけは確かに言い得る。よって本稿では、取り敢えず「実作説」側に立った考察を試みていきたい。副題を「実作説の可能性」とした所以でもあり、当然ながらその考察結果に対しては、常にかかる留保条件が付加されることになる。

## 二 規制の撤廃

さて、本歌の作歌事情などを考えていくに先立ち、まずはその左注について若干触れておきたい。一般的に左注はその詞書に比して物語的であり、より伝承性の強い内容を示すということが指摘されており、この点は前掲した左注の末尾に「……となむ語り伝ふる」とあるところからも首肯し得る。だが、かつて久曾神昇氏は、『古今集』伝本の内、元永本・筋切・唐紙卷子本など所謂元永本系の諸本では、高野切等諸本における左注が詞書部分に取り込まれている点に關し、『元永本系統が前案的性質のもの、高野切等が後案的性質のもの』と論じられ、詞書が左注に変わった集中唯一の例として本歌を取り上げられた。しかし、かかる見解については異論も多く、たとえば片桐洋一氏による「成立の過程において漸次改訂されていった異文ではなく、享受の立場からの改変」された詞書が元永本系諸本におけるそれという解釈の方が妥当だろう。また同氏はごく最近発表された論文でも、

『古今集』の左注は、いずれも撰者段階のものではなく、享受段階になつてからの付加と考えられる……<sup>8)</sup>

との見解を示しておられ、極めて妥当な解釈と判断される。そこで、右の片桐氏の見解を踏まえ確認しておきたいことがある。それは、『古今集』における本歌を考えていく場合、

その作歌事情で信頼をおくことの出来る内容は、一応はただ「もろこしにて月を見てよみける」とある短い一文のみとなるということである。なお、左注の伝承する内容が、天平勝宝五年当時の歴史的事実と合致しないということについては、かつて杉本直治郎氏が『唐大和上東征伝』などの記事を根拠としつつ立証されたこともあり、この点からも先に示した確認事項の妥当性は裏付けられる。すなわち、仲麻呂や鑑真たちを分乗させた四つの船は、明州の海辺ではなく蘇州の黄泗浦から揚子江上へと出港したのであり、またこの時に起こった鑑真の東行を阻止せんとする一派の不穏な動きをも併せて鑑みれば、現地の人々との友好的な「馬のはなむけ」などは行われなかつたという可能性が、極めて高いと判断されるのである。なお付言すれば、かかる本歌の左注後半部の文言の成立には、同集仮名序における大和歌の本質・有効性などを説く文脈が、おそらくは遥かに関与しているものとも考えることが出来るのではあるまいか。

以上の点を踏まえて言えば、たとえば『百人一首切臨抄』(華堂切臨著・慶安二年成立)の「又只哥の右書斗まで見る時ハ遙の旅に居て日本へ心をうつして詠スル心を思ひやりてみれハ尤あはれふかく千万の心こもれる也」<sup>10)</sup>という指摘や、『百人一首古説』(賀茂真淵著・寛保三年頃成立か・享保頃成立とも)に「只もろこしのいつこにまれ、月を見てよめる」<sup>11)</sup>云々

とある推定、また『百首異見』（香川景樹講説・文化九年成立）が「もろこしにて月を見てよめるとある端詞のま、に見おきてかなふへし。（中略）唐にてよミたらんハもとよりたかふへからぬ事なれば右にしろし明州にて物せることハうきたる説なれハ左にかゝれたる也<sup>12</sup>」などと記述しているような内容が、俄然注目すべき先見となつてこよう。つまり、「実作説」側に立つて考えた場合、本歌は彼が養老元（七一七）年に二〇歳で渡唐して、そして宝龜元（七七〇）年七三歳で長安に没するまでの間の、そのいったいいつ頃の作であるのか、実は定かではないということになるのである。

だが、大方の先行研究によれば、右の記述には自ずと一応の規制が加えられることになる。すなわち、「実作説」を主張する限りにおいて、当の仲麻呂自身は結局帰国することが出来なかつたわけであるから、本歌はいったい誰の手によつて我が国へ運搬されたのか、また何故に『万葉集』には収録されなかつたのかというような主旨の問題を考慮する必要がある。生じてくるのである。その際従来の研究の始どのものが問題視するのは、本歌の作歌年次として古来言われ続けてきた例の天平勝宝五（七五三）年という時期についてである。

周知のように、『万葉集』所収歌の中でその作歌年次が判明している歌の下限は、天平宝字三（七五九）年正月元旦、因幡の国庁で国司や郡司らに饗宴した際に大伴家持が詠じ

た、「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事<sup>13</sup>」という歌（巻二〇・四五・一六番歌）である。だとすれば、もし仲麻呂が天平勝宝五年、あるいはそれ以前の段階で本歌を詠んでいたとした場合、日本への伝達事情等の問題は依然として残るものの、一応は『万葉集』に収録されていても不思議はない。この点に関する先行研究は、大別をすれば次に示すような二通りの解釈に分かれているところである。

たとえば、櫻井満氏は「実作説」側にあるかと一応は判断し得る立場でのご発言として、

万葉の時代のことではあるが、当の『万葉集』はもはや大伴家持の歌日誌を伝えるだけの時代である。この歌が家持の歌日誌に採られる理由はなかつたのだ<sup>14</sup>。

と論じられ、これに対し「仮託説」を採る長谷川政春氏は、もし天の原の歌が古麻呂らを含めた宴席での作ならば、必ずや、古麻呂↓家持、あるいは同族の御笠↓家持の伝承径路を辿つて万葉集に収められた、とみてよいのではあるまいか<sup>15</sup>。

この見解をお示しになった。では、筆者はこの問題をどう判断するかということであるのだが、たとえば伊藤博氏が、末四巻、とくに巻二十には、いわゆる万葉終焉歌より作歌時が下るかもしれない歌がいくつかある。だから、万葉終焉歌をもって万葉最下限の歌と決定することは、簡

単にはできないのである。<sup>16)</sup>

と論じられ、また末四卷非歌日誌説を主張する中西進氏が、作者名の判る、年代判明歌の年代をもつて、万葉和歌の終焉と考える事はいわれないのだと、まず考えるべきであろう。(中略) 古代和歌の終焉は宝龜にある。『万葉集』は、いわば第五期を設定しなければならない。<sup>17)</sup>

と指摘なさった点を重視して考えれば、やや長谷川氏側の見解に分があるように思われるのである。また仮に、一応の万葉歌の下限を天平宝字三(七五九)年と想定した場合であっても、所謂二〇卷本万葉集の編集が未だ終了してはいない時期であるので、やはりこの天平勝宝五(七五三)年の「実作説」を主張する限り、本歌の万葉集未収録の問題は、この説それ自体を根底から揺るがしかねないものとなる。つまり、その場合においては、「仮託説」の方がむしろ妥当なのではないかという解釈が台頭し、しだいにそれが「実作説」を凌駕する状況に至るであろうことを示唆しているのである。

だが、翻つてよくよく考えてみれば、天平勝宝五年「実作説」の最大にして唯一の根拠たり得るものとは、結局のところ『古今集』左注ではないのか。そうである限り、古来多くの先行研究が「実作説」にかけてきた作歌年次に関する規制については、これを撤廃し改めて考え直すことが要求されよう。その際むしろ考慮されるべきは、万葉集未収録の問題に

ほぼ抵触をしない作歌年代、つまり天平勝宝五年をある程度下った時期においての「実作説」の可能性ではなからうか。

### 三 和歌と人生

管見の及ぶ限り、「実作説」を採りながらも万葉集未収録の問題を一応は乗り越え、かつ具体的な本歌の運搬者をも提示した数少ない論として、井上薫氏と東城敏毅氏の研究が挙げられる。井上氏は内外の史実を詳細に考察なさった上で、

仲麻呂が会った最後の遣唐使高元度が宝字五年八月大宰府に着いており、宝龜元年三月来朝の金初正が仲麻呂の手紙を届けているから、歌は高元度か金初正によつて日本に届けられたと思われる。<sup>18)</sup>

と論じられ、また東城氏も当時の東アジア情勢を史料を踏まえつつ丹念に分析なさり、本歌には「国際的緊張状態の中で帰国を延期させられ、鎮南都護として安南へ赴かなければならなかった」彼の心情が込められているとされた上で、

「天の原」の歌は、使命を果たせないまま帰国した高元度によつてもたらされたと考えられる……<sup>19)</sup>

というような見解を示された(高元度という人物は、なかなか帰国をしない清河を迎えるための迎入唐大使であり、金初正という人物は新羅の人である)。なお、井上氏の見解に付言すれば、氏の説は仲麻呂が天平勝宝五(七五三)年に蘇州で詠んだ歌

が、その後に高元度か金初正の手に渡り、それがさらに後になつて日本へと運搬されたと解するものであり、以下に筆者が述べる解釈とは全く異なる作歌年代・作歌事情を示されているという点を、ここで敢えて断つておきたい。

さて、やはりここで注目すべきは、先に引いた井上氏のご指摘にもあつた、金初正によつて届けられた仲麻呂の書簡であらう。『続日本紀』称徳天皇の宝龜元年三月四日の条には、

金初正ら言さく、「在唐の大使藤原河清・学生朝衡ら、宿衛王子金隱居の帰郷に属けて、書を附して郷親に送る。是を以て、国王、初正らを差して、河清らが書を送らしむ。……」<sup>20</sup>

とあり（河清・朝衡とは清河・仲麻呂の唐名、筆者の見る限りこの記事の信憑性を疑うに足る重大な事実は見出し難い。だとすれば、一応これを前提として解釈を行ったとしても差し支えはあるまい。そこで気になるのは、この書簡が日本へと運ばれてきた時期についてである。つまり宝龜元年とは、本稿冒頭部でも記したように、仲麻呂が七三年間の生涯を終えたまさにその年にあたるわけなのである。彼が没したのが正月、そして朝廷にこれが差し出されたのが三月四日のことであるから、その間凡そ二、三カ月くらいの差しかない。その上、船を大陸から日本に進めるのに必要な日数を考慮すれば、おそらくこの書簡は、仲麻呂が死去する直前に記したも

のではなかったのかという可能性が浮上してくる。具体的には、彼が安南節度使の任を終え、長安に戻つて来た神護景雲二（七六八）年七十一歳の頃から、翌三年頃までの間の執筆かとの推定が働いてくるわけである。

では、その仲麻呂の書簡は誰に宛てたものであつたのか。

前掲『続日本紀』の記事には「郷親に送る」とあり、ごく普通に考えれば、彼は日本に居る両親に宛て望郷の思いを綴つたのではないかとの解釈が生まれてくる。しかし、この書簡を彼がしたためているのは、おそらくは齢七〇を少し超えたくらいの時期と思われる、父船守らが未だ生存していたとは到底考えられない。だとすれば、彼はいったい如何なる人物をこの手紙の受取り人に想定していたのか。この点については、『続日本紀』聖武天皇天平七（七三五）年九月二十八日の条に、

九月庚辰、是より先、美作守從五位下阿倍朝臣帝磨ら、四人を故殺しき。<sup>21</sup>（傍線筆者）

とあり、また『続日本後紀』平城天皇の大同三（八〇八）年六月一三日の条に、

散位從四位下安倍朝臣弟當卒。正五位上勳五等船守之孫。

美作守從五位上意比麻呂之男也。<sup>22</sup>（傍線筆者）

ともある記述などを踏まえ、この傍線部の人物と仲麻呂の關係について、たとえば井上薫氏が「留学生に選ばれた点から推せば仲麻呂の方が兄であろうか」と推定され、また鬼頭清

明氏が「兄弟に意比麻呂がある」と指摘なさった点が注目される。つまり、おそらく彼には「オビ(ヒ)マロ」なる兄弟がいたであろうことが分かり、かの書簡はこの弟かと思われる人物に宛てたものではなかったのかと考えられるのである。

次にその書簡の内容であるが、詳細はやはり不明とせざるを得ない。だが、彼の残した漢詩二篇より判断すれば、ごく多少のことならばそれを推定することが出来るようにも思われる。

# 「失題」

## 「銜命使本國」

慕義名空在  
愉忠孝不全  
報恩無有日  
販國定何年<sup>25</sup>

銜命將辭國	非才忝侍臣
天中戀明主	海外憶慈親
伏奏違金闕	駢驂去玉津
蓬萊鄉路遠	若木故園隣
西望懷恩日	東歸感義辰 <sup>26</sup>
平生一寶劍	留贈結交人

右上段に引いた「失題」(『古今和歌集目錄』に所収)という絶句は、天平五(七三三)年に第九次遣唐使らとともに帰国せんとして玄宗に上申するも、これを却下されたその直後くらいのもので、また下段の「銜命使本國」(『文苑英華』・『全唐詩』などに所収)と題された五言排律の方は、天平勝宝五(七五三)年に第一〇次遣唐帰還船にての帰国が決定し、直後に開かれた長安での宴席において、王維から贈られた同型

の詩に応えるために成したものである。かかる二篇の仲麻呂作漢詩について、その研究の第一人者杉本直治郎氏は、

それらの底流には、當時の世界観に基づく慕華思想、いわば Internationalism と、人生観に根ざす望郷思想、すなわち Nationalism とが、看取されないことはなからう。<sup>27</sup>

というように述べられたが、つまり唐朝における高級官僚としての気概がその理性的文言の背後にはあるのであり、それが彼の望郷の念、あるいは日本人としての identity との間で葛藤するも、結局それが見事に融合して表現されているわけなのである。また、それが儒教的精神からの発露であれ何であれ、「失題」における「愉忠孝不全」、「銜命使本國」における「海外憶慈親」などの表現から考えれば、かの書簡の一部には、「亡き両親に対する深い慕情」といったような内容が記されていたのではないかと判断されるのである。

さらに、何故敢えてこの時期に彼は手紙をしたためたのかという点を顧慮した場合、一応は次のようなことも推定出来るのではあるまいか。つまり、齢七〇を過ぎて安南から長安に戻った仲麻呂は、おそらく自らの余命がもう幾許も無いだろうことを察知していたのではないかという推定がそれであり、安南節度使の任を解かれたのも、彼が老齢であるばかりではなく、何かしらの病を得てしまったためというような可



能性も、強ちこれを一蹴には出来ないようにも思われるのである。いずれにしても、一九歳で遣唐留学生に選拔され二〇歳で渡唐して以来、故郷の夢を幾度となく見るも結局は二度とその土を踏み締めることなく在唐五〇有余年を経た今、まさに命の尽きなんとしている我が身の上を振り返り、今は亡き両親、また懐かしい故郷への思いをせつせつと綴った、云わば人生の総決算のような意味合いが、かの書簡には込められていたのではないかとの解釈も生まれてくるわけである。それでは、この書簡に和歌は添えられていたのだろうか。この点について、『続日本後紀』仁明天皇承和三（八三三）年五月の条には、死後正二品を追贈された彼に關しての、

故留學問贈從<sub>二</sub>品安倍朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正<sub>二</sub>品。身涉鯨波。業成鱗角。詞峰聳峻。學海揚漪。顯位斯昇。英聲已播。如何不愍。莫遂言歸。唯有挾天之章。長傳擲地之響。<sup>28</sup>（傍線筆者）

との記事が載っている。中でとりわけ注目しに価するのは、傍線を付しておいた箇所だと思われ、『漢書揚雄伝』あるいは『文選蜀都賦』あたりをその典拠とするこの「挾天之章」とは、大略「天を光り輝かすような章」との意味合いを有する表現である。もちろん、この種の記述には文飾というか誇張というか、とにかく虚構的な要素も一応は看取せねばならぬ

のが常であつて、またこの「章」なるものの実態が、単に文章のことを指しているのか、漢詩をも含んだ形の文章の謂なのか、あるいは大和歌の添加されたものであつたのかという主旨の問題は、その「章」自体が散佚をしている状況において、当然確実なことは不明である。だが、この表現を当該歌と結び付けて考えるべきか否かという問題は、古来論議の対象となつており、たとえば契沖は、『百人一首三奥抄契沖書入』（元禄五年成立三奥抄書入本）において「承和三年贈仲滿正二位詔曰、唯有挾天之章長傳擲地之響。この哥の事なり」と述べ、『百人一首改観抄』（元禄五年成立）や『古今余材抄』などでも同様の指摘をしている。これに対して賀茂真淵は、『百人一首古説』（寛保三年頃成立か・享保頃成立とも）や『宇比麻奈備』（明和二年成立）などにおいては態度を保留するも、『古今和歌集打聴』の中では「挾天之章」とは今の歌をさせる詞也と或人はいへれど挾天庭など云もてみればたゞ文學もて聞え上たるをいふなるべし」と述べて、明らかに契沖の指摘を受けこれを批判する解釈を行っている。

さて、右の契沖・真淵以来の対立をどう解するかという点であるが、前掲『続日本後紀』には、既に「詞峰聳峻。學海揚漪」などと彼の文才・学才を称賛した内容が見受けられるわけであるから、この「唯有挾天之章。長傳擲地之響」なる表現は、単に「たゞ文學をもて聞え上たるをいふなるべ

し」というような意味合いでなく、やはり具体的な文章なり作品なりを意識したものと判断出来よう。また黒川洋一氏が、

この言葉が具体的にいかなる作品を指すかと言え、  
「あまの原」の歌であると言うほかはないわけである。

何となれば、仲麻呂には数多くの漢詩文があつたと想像されるが、それらが承和のころにわが国に伝わっていた形迹は何一つないからである<sup>⑪</sup>。

と指摘なさった主旨の内容は興味深い。つまり、杉本直治郎氏によつてかつて詳細に論じられた通り、前掲「銜命使本國」の詩を仲麻呂の作だと我が国で最初に認定した人物は、羅山の第四子たる林春徳であり、当然その時期は遙か近世にまで下ることとなる。また「失題」を引く『古今和歌集目録』の記述中に引かれた『國史』とは、『日本紀略』宇多天皇寛平四（八九二）年五月一日の条に見られる散佚した『國史』である可能性が高く、いずれにしても結局この二篇の漢詩が、仁明天皇の承和三（八三六）年時点の段階で、既に彼をその作者に比定していたとは到底考えられないということなのである。である限り、いかに『続日本後紀』の記述に文飾誇張があろうとも、やはり「挾天之章」なる表現は、当時の仲麻呂が残した何ほどの文章を指しているかと判断してはば紛れは無く、それはやはりかの散佚した書簡を意味するのではないかとの解釈が、その可能性の内では最も高い位置を占め

るものとなるのである（黒川氏論のように、この文が直接当該歌のみを指すという解釈とは全く異なるという点を取って断っておきたい）。また、「天の原」の和歌が当時単独で我が国に伝来したという確証は全く無く、「長傳擲地之響」という表現については、あたかも和歌などの韻文が当時伝誦されているというような印象も強く受ける。かの書簡の末尾あたりに、やはり和歌一首が書き添えられていたのではなからうか<sup>⑫</sup>。

以上、阿倍仲麻呂が残したとされる在唐歌一首をめぐって、「実作説」の立場から縷々思うところを述べてきた。足らざる点多々あつたかと思われるが、一応ここで纏めを行っておきたい。要約すれば、齡七〇前後で安南から長安に戻った彼は、もはや我が身に終焉の時が近付いていることを悟り、これまで孝を尽くすことが出来なかつた亡き両親に慕情を募らせ、また懐かしい故郷の風景などにも思いを馳せて、そういつた回想の中に見えてくる心情を現実の我が身に重ね合わせた。そしてその思いのたけを、おそらくは弟の「帶麿（意比麻呂）」に宛てて手紙にしたため、彼は人生の総決算のようなその手紙の末尾あたりの部分に、かの「天の原ふりさけ見れば」の和歌一首を添え書きた<sup>⑬</sup>。その書簡が金初正の手に渡り日本へと運搬され、後にその末尾部分がある程度の範囲、すなわち同族の阿倍氏周辺にも伝わり大切に保管・誦詠され、さらにその後これに深い感銘を抱いた紀貫之の手によ

つて、『古今和歌集』巻第九「羈旅歌」の部の冒頭に据えられることになったのではないかという可能性がそれである。

今後は右の推定をより確度の高い内容とすべく、さらなる研究を積み重ねていく所存である。なおその際には、本歌の上二句と下三句との間で、あたかも万葉的表現が接合されたかのような印象を覚える点や、山上憶良の「いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ」(『万葉集』巻一・六三番歌)を唯一の例外として、当時の遣唐使・遣新羅使たちは何故彼の地では和歌を詠まなかったのか(実際に歌詠はあったのだが、それが記録されなかったり、伝来しなかったためという主旨の解釈もあるが、筆者はそのような解釈には相当の疑義を持っている)というような大きな問題などをも含め、当然本歌そのものについての表現検討などを中心に据えていくこととなるが、それら諸問題については紙幅の関係上これ以上の言及は避け、ごく近い将来新たに別稿を用意して、その中で具体的に説明をさせていただくことにしたい。

## 【注】

- (1) 「阿倍仲麻呂の詩の周縁―『失題』の詩の場合―」(『東方学』第三九号・昭和四五年三月)
- (2) この時李白は仲麻呂が死亡したと思ひこみ、「哭晁卿衡」という詩を作っており、詩中の「明月不帰沈碧海」との表現をめぐっては、アーサー・ウェイリー氏原著『李白』(小川環

樹氏と栗山稔氏の共訳・昭和四八年一月・岩波書店)が所謂「漢詩原作説」の立場から、「『明月』への言及から、仲麻呂が出発にあたって書いた詩を李白は知っていたように思われる」と推定したように、これを当該歌乃至その原詩と連環させて解釈すべきとの見方がある。だが、たとえば北住敏夫氏「阿倍仲麻呂『天の原』の歌私考」(『文学・語学』第八八号・昭和五五年一〇月)の「そのやうなことは考へずに、李白の詩における『明月』は、仲麻呂といふ人を喩へたものと見ておいてよいのではなからうか」との解釈もあり、本稿はかかる解釈を妥当なものと捉えたい。なおこの李白の漢詩と当該歌との結び付きを最初に指摘したのは、管見の及ぶ限り、延宝八年木下長嘯子著『百人一首抄』(吉田幸一氏編『長嘯子続集上巻』所収・昭和六〇年一月・古典文庫)が「明月ハ仲九ヲサシテ云リ」と注する内容あたりかと思われる。

- (3) 杉本直治郎氏「阿倍仲麻呂は安南節度使として任地に赴いたか否か」(『古代学』第三卷一・号・昭和四一年一〇月)
- (4) 杉本氏著『阿倍仲麻呂傳研究―朝衡傳考―』(昭和一五年一月・育芳社)及び、今枝氏著『唐代文化の考察(1)―阿倍仲麻呂研究―』(昭和五四年二月・高文堂出版社)
- (5) 片桐洋一氏著『古今和歌集全評釈(中)』(平成一〇年二月・講談社)
- (6) 『古今和歌集成立論(研究編)』(昭和三六年一〇月・風間書房)
- (7) 『古今集の本文と伝本』(同氏著『古今和歌集の研究』所収・

- 平成三年一月・明治書院)
- (8) 「平安時代における和歌・歌集の成立と享受」(『古今和歌集以後』所収・平成二年一〇月・笠間書院)
- (9) 「阿倍仲麻呂の歌についての問題点」(『文学』第三六卷一〇号・昭和四三年一月・岩波書店)
- (10) 田尻嘉信氏編『百人一首切臨抄』(『百人一首注釈書叢刊』4・平成二年三月・和泉書院)
- (11) 小町谷照彦氏他二氏の編『賀茂真淵全集第二卷』(昭和六年八月・続群書類従完成会)
- (12) 大坪利絹氏編『百首異見・百首要解』(『百人一首注釈書叢刊』19・平成二年一〇月・和泉書院)
- (13) 小島憲之・木下正俊・東野治之の三氏の校注『萬葉集④』(『新編日本古典文学全集』9・平成八年八月・小学館)以下『萬葉集』の引用は全て新全集の訓み下し文による。
- (14) 「三笠の山の月―阿倍仲麻呂の歌をめぐる―」(『万葉びとの世界―民俗と文化』所収・平成四年一月・雄山閣出版)
- (15) 「阿倍仲麻呂在唐歌の成立―歌語り発生考―」(『國學院雑誌』第七〇巻六号・昭和四四年六月)
- (16) 「万葉和歌の下限」(同氏と稲岡耕二氏の編『万葉集を学ぶ―第二集―』所収・昭和五二年二月・有斐閣)
- (17) 「万葉歌の終焉」(『中西進万葉論集第五卷―万葉史の研究(下)―』所収・平成八年五月・講談社)
- (18) 「阿倍仲麻呂・鑑真」(川崎庸之氏編『日本人物史大系第一巻・古代』所収・昭和三六年四月・朝倉書店)
- (19) 「阿倍仲麻呂在唐歌―その作歌事情と伝達事情―」(『日本文学論究』第五四冊・平成七年三月・國學院大学国文学会)
- (20) 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸の四氏の校注『続日本紀四』(『新日本古典文学大系』15・平成七年六月・岩波書店)
- (21) 前注四氏の校注『続日本紀二』(『新大系』13・平成二年九月・岩波書店)
- (22) 黒坂勝美氏他編の『日本後紀・續日本後紀・日本文徳天皇實録』(『新訂増補國史大系』第三卷・昭和四一年八月・吉川弘文館)
- (23) 注の(18)に同じ。
- (24) 大曾根章介氏他八氏の編『日本古典文学大事典』(平成一〇年六月・明治書院)の「阿倍仲麻呂」の項目。
- (25) 『群書類従・第一六輯〈和歌部〉卷第二八五』(昭和五五年七月・続群書類従完成会)
- (26) 猪口篤志氏著『日本漢詩(上)』(『新釈漢文大系』45・昭和四七年八月・明治書院)
- (27) 注の(1)に同じ。
- (28) 注の(22)に同じ。
- (29) 林勉先生他三氏の編『契沖全集第一五卷』(昭和五〇年二月・岩波書店)
- (30) 鈴木真喜男氏編『賀茂真淵全集第九卷』(昭和五三年九月・続群書類従完成会)
- (31) 「阿倍仲麻呂の歌について―アーサー・ウェイリーの説に關

連して―」(『文学』第四三巻八号・昭和五〇年八月・岩波書店)

(32) 注の(1)及び「阿倍仲麻呂の詩の周邊―『銜命使本國』詩の場合―」(『東方学』第三七号・昭和四四年三月)

(33) 注の(31)に示した黒川氏論の注記に、「近藤芳樹は『挾天の章』を解して、『その挾天は、文選の蜀都の賦より出で、かの注に、挾猶蓋也とあり、蓋は笠のことなれば、すなはち天の原三笠の山をかすめいへる言葉なりけり。』(『寄居歌談』一)と言っている」とある。かかる解釈は古來行われ、たとえば杉本直治郎氏や井上薫氏らもこれに賛同しているわけであるのだが、これがもし妥当ならば本稿における推定はより確度を増すのではないかとも思われる。だが、黒川氏はその注記末尾において、「一句をそう解することはいかに言っても無理である。なお、『挾猶蓋』というのは、『文選』に注を加えたいわゆる五臣の一人、唐の呂向の説である」との解説を施しておられ、本稿では取り敢えず自説には不利と判断される黒川氏のような慎重論を採っておきたい。

(34) 歌中に「春日なる三笠の山」が歌い込まれた事情については、『続日本紀』などを踏まえ小川環樹氏が指摘された、当時三笠山の麓で行われていた遣唐使が発直前に行う祭祀との関わりを重視する説や、『東大寺要録』などを援用しつつ鈴木靖民氏が論じられた、後年藤原氏によってこの地に春日神社が創建される以前に、三笠山の或る場所には阿倍氏の氏神を祭る社があり、これをその発想源とする説などが考慮すべき

ものとして挙げられよう。また歌中に「月」をめぐる表現が歌い込まれた事情については、新聞一美氏や東城敏毅氏らが指摘された、「王昭君」や「関山月」などの漢詩的素材に拠っていたらうという説や、空間的に離れている親しい人間を思ふ際の当時の和歌表現の類型性の問題などが考慮すべきものとして挙げられよう。これら諸点の詳しい分析などは本論でも述べた通り、紙幅の関係上割愛し別稿に譲りたい。

〔付記〕本稿は、平成一二年度本学日本文学文化学会の秋季研究発表会において、「阿倍仲麻呂の和歌と人生」というテーマで発表させていただいた拙論をもとにしています。その際貴重なご助言を賜った、大久保廣行先生・中嶋尚先生・竹内清己先生・阿久澤忠先生にあらためて厚く御礼申し上げます。なお前記口頭発表は、本学大学院博士後期課程で開講されている、神作光一先生の『小倉百人一首』ゼミでの発表をその土台とするものであり、あたたかいご指導を頂戴した神作先生に謹んで謝意を表します。また本稿執筆に当たり良き指針を与えて下さった大久保先生、御高配を賜った事務局の諸先生方に対しても末筆ながら厚く御礼申し上げます。

(本学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程三年)